

# 応化会だより

昭和51年7月 第20号

早稲田応用化学会

# 会長交替にあたって

鎮目達雄

## 会長就任の挨拶

本年2月20日の運営委員会の席上棚橋会長さんが一身上の御都合により突然会長辞任の意を洩られました。

応化主任加藤先生はじめ教室の諸先生並びに大友副会長さん等が強く慰留に努めました。が棚橋さんの決意堅く翻意もだし難く不肖私が後任の御推薦を受けました。



以下諸々の大先輩、或いは大会社の社長同窓を差し置いて、輝かしき歴史と伝統を継ぐ重責を大阪在住の非才が全うすることは大変難しく、固辞を重ねて参りましたが教室諸先生の御許しを得ずここに教室への恩返しと思いを新たに、驚馬に鞭打ち御受け申し上げた次第です。何卒教室の諸先生始め歴代の会長さん大先輩の皆様或いは各委員ご担当の方々、評議員の方々、多数会員の皆様の絶大な御支援と御協力を御願ひし、次期会長さん選任までの短期間のリリーフの心組みで居ります故何卒宜しく御指導賜わります。本会の歴史は古く大正12年5月小林恩師の創立に始まり54年目に当ります。小林久平先生の官尊民卑の風潮に抗する卓見により、他の何れの国立大学にもない、一私学の応用化学科の教室を中心とした諸先生と在学学生、卒業生を網羅した渾然一体の親睦と、学問技術の啓発を目的とした、単なる同窓会を超えた意義多い会として連綿として受け継がれた伝統であります。会員数も今や約四千名になんなんと居ります。嘗ては昭和4年から六日会なる名称で内幸町の大阪ビル地下のレインボーグリルに於て、隔月一回の晩

餐会を催し、化学技術者の閉鎖性を改善する意図を以て先生と卒業生と学生との集會を持ち、会毎に已に社会に活躍して居られる先輩の卓話を企画し、学生に社会への窓として有益な活きた実学の間を持って居りましたが、財政と戦争の影響で昭和15年12月を以て閉鎖の已むなきに至りました。又早稲田応用化学会誌も昭和13年7月第1号を発行し、昭和40年まで78号まで発行し、幾多の有意義な學術論文も数多く掲載され日本化学総覽にも登録されました。近時主として財政難の故に会報も中断し、応化会だよりを年2回位の発行しか出来ませんのは大変残念なことと思ひますのは、會員皆様も御同感のことと思ひられます。今は亡き石川先生も何とか往時の興隆に思いを馳せて、寸暇を惜しんで会のために尽瘁され、公害ゼミナールや工場見学会を数々催され、財政の建直しを踏って居られました。何分にも會員数が4千名を超え学生の数も700名位の多人数の所帯となり、庶務、会報編集にも大変手数と資金が要しますし、先生の研究、勉学の合間の仕事としては大変な努力を要しますし、専従の会務担当者を得ることが、石川先生の念願でしたが未だに実現不可能です。会費の徴集も手数がかかり、物価暴騰の折柄会費は戦後500円を昭和45年に1,000円にし、50年に1,500円に値上げ致しましたが、物価は御承知の様に戦後数十倍になって居りますし、会費の納入率が40%位の低さでありますのでいつも會計不如意の状態です。今年度の予算は会費収入が約200万円位ですが只今編纂中の名簿（4年に1回発行）が3,000部作成し、180万円と送料が約45万円かかります。毎年の積立金が若干ありますが残金では応化会だよりを今年は一回位（約60万円）しか出来ません。其の他事務費、集會費、学生部会費、其の他に約65万円毎年使って居ります。運営委員会でいつも財政難をかこって居ります。會員の皆様にかかるといふ知恵がありましたら御助言載きたいと思ひて居ります。尚、多数の會員の皆様が化学工業界に於て会社の中核としてまた重役として、輝かしく活躍して居られますが、産学協同の主旨を御理解御協力して載き、母校の諸先生の御研究の内容を御認識され、何等か関連した、或いは共通した研究テーマがありましたなら、又はそういう予想が考えられましたなら、御遠慮なく教室へ御訪ね下され共同研究を御委託下さるか、研究生を御派遣下さり御利用載ければ、先生方の研究に神原周先生の平素御呈言される実学により、先生方の研究も巾広く社会の窓に触れられよい刺戟にもなろうし、学生の勉強も生きた研究の促進にもなろうかと思ひます。且つ研究が少しでも効果を得られれば会社も助かり又先生方への研究費の一助も得られ産学協同の実が挙げられ早稲田応用化学会の興隆につながるかと思ひます。其の節橋渡しの役は吾々小使い役を果させて載き度く念願して居ります。

大学院生、在学生の方々へ

近来大学の財政難から学生の定員が官学に比べて大変多数となり、教室の先生方或い

は卒業生との交流が少くなり吾々在学当時の様なスキンシップが乏しくなり、疎遠になりがちで淋しい思いがあらうかと思ひます。学生数が少ない時代には私大阪支部を担当して居りまして、春休み、夏休みを利用して先生方に引率されて毎年見学会に10人~20人位の後輩の方々が来阪され、些やかな歓迎パーティを大阪で催しまして先輩、後輩の和気藹藹の放談会を持ちまして、吾々も楽しく学生諸君も後年になって感謝もされ、よい社会勉強にもなったと思ひ出して載きました。色々な事情(余りに学生数が多く会社の見学も断られたり、又は学生諸君の財政難から)でここ十年位前に中止となつて居りますが、若し小人数でも纏まりましたら私も先生に御無理をお願いし、再び実現して見たらと提案致し度いと思ひます。

一般名手孝之さん(新9卒東燃石油化学)の提案により、嘗ての六日会の縮版として学生と先輩との交流の企画として先輩の特別講義を聞き、其のあと先輩を囲んで茶話会を開いたらと云う名企画により、教室の先生の方々が採り上げて載きました。

49年9月 坂部 孔氏の石油代替燃料

49年10月 海野 良一氏 農薬の話

49年12月 細田喜六郎氏 ポリエチレンフォーム

49年12月 大饗 茂氏 有機化学と硫黄

50年4月 柴田 和雄氏 光合成のしくみ

50年11月 神原 周氏 新しい社会と化学技術

51年1月 私 化学技術の開発と発展

と実現致しましたが皆さん斯号では権威者の方々に、必ずや何か得る所があったと思われれますが、末だ聴講参加者が少ない様に思われれますので、何るべく多数参加され先輩との交流に心掛けて載き度く思ひます。残念なことには予算の関係でゼミナール後の茶話会、座談会が充分行なわれませんでしたので、此の点今後極力予算を捻出して座談会を必ず行い度いと思つて居ります。又応化会の企画としては49年5月古関敬三氏の $\frac{1}{1000}$ ミりに生きる。50年6月川合善三郎氏のセメント新焼法等貴重なゼミナールがありましたが、之は会費の都合で学生さんの参加が少なかったのが残念でしたが、今後学生さんの会費は低額に致しますから成る可くこういう機会には出席して下さい。近年化学公害のマスコミの過大な採り上げ方により、化学志望の意欲をそいで居りますが、基礎物質よりの吾々の生活関連化学製品のプロセスが複雑なため、化学工業の罪悪視を招いて居りますが、化学技術製品は今後益々多用で生活必需製品を生み出すものなのです。

米国のマグロウヒル社の1982年までの産業の伸び率予想では

- ① 化学工業 227 %
- ② プラスチック 176 %
- ③ 電機産業 165 %

となつて居り化学工業の将来性は第一位であります。



今後開発発展性のある研究テーマを挙げますと、

1. 合成蛋白（錯体化学等）
2. 生命化学（ガン予防策，人造血液等）
3. 耐熱合成繊維
4. 重質油分解（タールサンドを含む）
5. 人造木材
6. 軽量木材（耐燃性）
7. 超強力金属（ホイスカー等）
8. プラスチックと金属との合成
9. 太陽電池（半導体応用して $H_2$ と $O_2$ に分解し同時に発電）
10. 核融合炉
11. 酵素化学（酵素によりアミノ酸合成し人造食料の合成）
12. 微生物化学
13. 蛍光化学
14. 新甘味剤の合成（南米ステビオカイド等砂糖の300倍で低カロリー）

等々新テーマは続々として尽きず前途洋々として居ります。何卒広く各分野の知識を吸収して現在は基礎化学をしっかり身につけて載き度く存じます。

今後共院生さん，在学生さん方々の応用化学会の発展のために御協力をお願いします。

（昭和11年卒，大阪有機化学工業株式会社）

## 思　い　つ　く　ま　ま　に

森 田 義 郎

私が早稲田大学に入学してからもう40年に近い歳月が流れた。過ぎてみるとまったくつかの間のような気がする。それは歴史的にみて例のない激動期であったが、このため一層短く感ずるのかも知れない。そうはいうものの私のように終始早稲田大学と共にいた者にとっては早稲田にまつわる思い出は限りなくある。中でも自分が若いころに経験したあの怒涛のような時代はことさら思い出が強い。応化会の会員の多くはもうこの時代の母校のことを知らない。その時応用化学の先生や学生がどのようなようであったかを知って頂くのも何かの足しになるかも知れないし、また先輩にはそれなりの懐かしさがあるのではないかと思って筆をとった。紙数の許す限り思いつくままに書かせて頂く。なお、蛇足とは思いますが、最後に御挨拶の意味で若干の感想をつけ足すことを予め御了承いただきたい。

昭和 16 年 12 月 8 日

早朝の電車の中で機械科の友人に会った。彼は興奮した調子で“おい戦争が始まっぞ”といった。とたんに私は“どこで戦争が始まった”と聞いた。随分間抜けな質問である。戦争は当然予想されていた。でも米国相手にまさかという気持もあったし、当時の情勢として強国がいきなり隣国へ進攻することも珍しくなかったのも、とっさにドイツがソ連のことと感じとったのである。相手が米英と知って、これは一大事と心臓の高鳴りを覚えた。応用化学の廊下で会った級友に開戦を知らせると跳び上がるようにして驚声をあげた。自分も多分そんな調子であつたらうに、自分のことは忘れて、人の姿がいつまでも印象に残っている。

朝の講義の前の教室は沸きかえるようだった。多分今日は休講になるだろうと思っていたら、定刻に山本先生が入ってきて“とうとう始まりましたね”といっただけで直ぐにいつもと変わらず授業を始めた。休憩時間に宇野先生が“ザマーミロ”といったが、それを聞いて当時の米国の態度に頭にきていた我々も一緒になって流飲を下げた。あとのツケの高いことなどは毛頭念頭になかった。

午後は休講になったので、それこそ全学生が参加して英米両大使館にデモンストレーションした。途中沿道の人々の歓呼に送られ、校歌や愛国行進曲で氣勢を挙げたが、この時のプラカードに始めて打倒“米英”という言葉が現われた。それまでは“英米”だったのである。“米英”という言葉は聞きなれなかったが、やはり時代の変革を感じさせた。私がデモに参加したのはこれが最初であり、また最後でもある。

### ミッドウェー海戦

昭和17年6月無敵を誇った帝国海軍は米空軍のため痛烈な打撃を蒙った。すでに米軍は日本海軍の暗号を解読し、新兵器レーダーにより連合艦隊の動きを察知していたのである。しかし、大本営からはいつものように大勝利しか報道されなかった。その頃貴族院議員で応化会の副会長でもあった故肝付兼英氏(2回)が大学にこられ、極秘情報だがと前置きして我々学生に話されたことがある。わが海軍はミッドウェーで大損害を受けた。相手は双葉山みたいな大横綱である。初戦の戦勝で一度は土俵際まで押し込んだが、がちり受けとめられ、再び土俵の真中まで押し戻されたところだ。これから本勝負でよほど頑張らないと大変なことになるといった内容のことを、ちょっと古い方なら誰でも御存知の例の調子(肝付氏の弁説は長い間応化会名物であった)でとうとうと述べた。翌日当時の応化会会長で学科主任の小栗先生の講義があつたが、その冒頭に肝付君は憂国の士であり、君達の一層の奮起を望むあまり、昨日ああした話をしたのであろうが、何分にも口の滑る方なので、どうか誤解しないようにと言いつされた。戦争に負けそうだとただで国賊になり、特高や憲兵隊に引張られた時代である。

先生は右翼学生でもいて騒がれたらと心配されたようであるが、我々の方には別段そうした分子はおらず、さすがに早稲田の先輩は勇敢だなあと感心した程度だった。当時でも極端な右翼の連中は大学には比較的少なく、主に軍部や農村にいた。今日では大学教育の普及と社会情勢の変化のためまったく同じとはいえないまでも、現代の一般学生が過激派分子をみるのと同様な目で当時の学生も神がかり的な右翼分子をみていたのである。それだけに肝付先輩も後輩の応化学生を信頼していたのかも知れない。

## 昭和20年8月15日

前日からのラジオは正午に玉音放送があるから国民はすべて謹んで拝聴するようにと繰り返し流していた。午前中頻繁だった敵機の来襲も正午を期してぴったり止った。当時私は石油工学科（昭和17年新設され、昭和21年より燃料化学科）の教務補助（現在の助手）だったが、今も残っている穴八幡の隣の赤煉瓦の中で先生方や学生諸君と一緒に放送を聴いた。先生方といっても石油工学科には山本教授、大坪助教授、村井助教授の3人しかいなかった。学生の中には加藤、長谷川、藤井の3先生もいた筈である。玉音放送の内容はどんなものか予め誰もが知っていた。安物のラジオでも防害電波を避けてダイヤルをうまく合せば本土近くから発信される敵側の放送をキャッチすることができた。私の周囲の人達は意外に平静だった。もう祖国がとても抗戦できるような状態にないことは誰も肌身に感じていたし、また数日前からの特殊爆弾（原爆）の恐怖におののいていただけに背中合せの死から解放されてむしろホットした気持だった。

大学からの帰途始めて脚半（ゲートル）をはずして焼野原の中を歩いて行くと“ああ生きていた”と大声で叫びたくなった。後年海外を廻って最後に東京空港に着地するといつも生きて戻れたと感ずるが、同時に必ずといってよいほど切実だったあの時の気持が連想される。

夜になってから漸く管制のとれた灯下に座り、幾分落ちつきを取り戻した時、これからの賠償と混乱がどんなに重荷になって負いかおさってくるのだろうと考えたら、急に背筋が寒くなった。

## 混迷の時代

終戦から昭和25年ごろまでは空前の混乱期であった。先生も職員も学生も食うや食わずやであったが、一家族のような雰囲気、皆で一緒になってハイキングをし、野球をし、室内遊技をした。つらい中にも亦嬉びがあった。それにしても当時の学生実験はまったく大変だった。水道水を使わせて蒸留水のもりで実験しろといった調子である。

こんな“つもり”実験でも学生が不満をいわず、そのつもりになってくれれば結構教育効果はあがるものである。この人達も今日では企業や学界で立派に活躍されている。後年異常としかいいようのない不満学生がイニシヤチブをとり、教師のいうことをきかず、教育が損われた時代があったが、この両時代を比較して教育というものはやはり適正な人数で行なわねばならぬことを痛感した。それにしても悔まれるのは理工学部的高度成長時代の大増員である。これに対して山本先生を始めとした応用化学の先生方の強い抵抗があったにも拘らず、マスプロ教育の効用が強く喧伝されて、我々の意見が通らなかった。今反省期に入って、かつてのマスプロ派も漸く致命的な失政に気付いてきたようである。

一方、当時の研究面はまったく惨めであった。研究室はあっても研究費はなく、ガス、水道、電気もとだえ勝ちで一遍に研究意欲を失ってしまった。それでも机の上だけで仕事のできる基礎学の人達の立ち直りは早かったが、私のような実験科学者は容易に回復できなかった。その上大学の給料では生活できず、共稼ぎで飢を凌ぐのが精一杯で、トンネルにはまっただま抜け出すことが出来なかった。自分が無能で何と惨めに感じたことであろうか。その後の時勢の推移は私に幸し、次々に意欲をそそる研究テーマを得ることができたが、25年以上たった今日もあの空白時にあれを勉強していたらという悔みは消えない。若い時代の時間は人生にとってかけ替えのないものである。

### ガス化研究事始め

ガス化の研究は私のライフワークともいえるだけに、その当初のことはことさら印象が強い。昭和27年も末に近いころ、東京瓦斯の中沢克己取締役（2回）からクラスメートの山本先生のところへ重油ガス化触媒の開発の研究委託があった。当時山本研究室の助教授であった私は研究計画と必要経費の案を携えて、そのころ浜松町にあった東京瓦斯の調査室を訪ねた。中沢先輩は跨ぐように炭火にあたっていたが、“今ガスが足りないんだ。ガス会社の重役がキンタマ火鉢をしなければならぬような始末だ。よろしく頼むよ”といわれて、こちらの申出をそのまま飲んでくれた。日本一のガス会社の重役でさえガス暖房を使えない有様を直接みて、自分に与えられた仕事の使命が実感となり、一層やる気をおこした。実験は間もなく開始された。暮から正月にかけて二日程休んだだけで、日曜も祭日もなかった。休日出勤の時は研究室の人達に昼食を奢ってやった。奢るといってもモリソバかラーメン位で大したものではない。たまたま安物の天井でも御馳走すると皆大喜びで満足してくれた。それらの人達の多くはもう会社の部長か次長になっている。今では高級レストランで私の方が御馳走になっている。共に苦労した人達が立派に活躍している姿をみることは何とも嬉しいことである。

その後この研究は東京瓦斯を中心とする大規模な共同研究に発展し紆余曲折を経た後、

世界最大の規模で工業化するに至った。当燃料化学研究室で今日までに石油のガス化およびその関連研究で博士を得た人は5名、修士にいたっては20名を下らない。

### 学会賞のこと

今回の原稿依頼は本年私が石油学会賞を受賞したので、何か感想を書けということだった。たまたま私は学会の調査団長として連続的に3回ほど海外に出かけ、その都度応化会だよりに執筆を依頼されたが、主催学会への報告準備を理由にいつも断り続けてきた。今回はどうしても書かねば義理が悪い羽目になった。しかし、学会賞受賞を主題にするのは面はゆいので、拙文に赤面しながら勝手に昔話を書いてしまったわけだが、最後に折角の編集の御好意を帯し、また御尽力下さった方への感謝の意味で若干の感想を述べさせて頂く。

私の学会賞受賞はこれで4度目である。先に山本先生と一緒に燃料協会賞(技術関係)と日本化学会化学技術賞を、また最近では個人で燃料協会賞(学術関係)を受賞している。燃料協会賞を2度受賞したのは私だけであり、また今回の石油学会賞も同学会の最高賞で今までに個人で受賞した人は幾人もいない。身にあまる光栄には違いないが、今ではむしろ失意の時代を思い出して胆を嘗るように努めている。それにしても私は幸運だった。よき師、よき弟子に恵まれ、その上伝統ある研究室をまかせられた。私を育成して下さった山本先生からは親にも勝る恩を受け、また多数の後輩が私を援助して下さった。さらに学会賞の推薦や選考に当って城塚先生や他大学あるいは研究機関の先生方の御尽力を頂いた。感謝にたえない。私自身がやったことは研究テーマを定めて、方向づけし、研究室の雰囲気を感じ立てる位で、後は意欲に燃えた若い人達に自由にやらせた。言い訳がましいが、私自身仕事が多く、しかも研究室はいつも大世帯だったので、こまかな指導は一切出来なかった。もし自負できるものがあるとしたら、研究テーマの多くが時代の先取りに成功したことであろう。学会賞は学者の優等賞のように思われるが、実は過去の研究室の総合力に対する評価であり、たまたま私がその代表者であったに他ならない。

5月7日に山本先生の喜寿を新制以降の門下生でお祝いする会があったが、同時に私の石油学会賞受賞の祝賀も兼ねてくれた。教師としての冥加に尽きる思いである。学会賞は善意の評価として有難く受けるものであるが、決して目的としてはならないと思っている。私の生甲斐はこれまでに得た専門の知識と経験が母校や社会のために役立つことであって、まだまだファイトは燃えている。皆様方の一層の御支援と御鞭撻をお願いしたい。

(昭和18年卒、応用化学科教授)

# か え り み て

中 村 代 仁

昭和24年の初夏、旧制専門部工科より豊明会記念応用化学実験室つまり応用化学科事務室へ移って来ました。その頃研究室も実験室も何か索漠に感じました。しかし授業は澆刺として学生達は活気に漲っていた。当時の学科主任は武富昇教授だったと思います。事務室は故岸田さんが停年数ヶ月前で故吉村さんでした。実験室関係は猿井、原、長島の三氏で切り廻していました。不慣れの私は硫化水素の悪臭に居たたまれず何遍か館外に避難して失笑を買った。職員中の紅一点は図書室の下郷さん現在の松尾夫人で絵明なお嬢さんでした。数ヶ月すぎた或る日、各教室より出される試薬等の購入請求伝票を持って新学科主任室へ参りました。用件の請求書に認印を捺印され一礼して退出する私にどう風の吹き廻しかかけ給えと言われました。温厚慎重の小栗捨蔵教授が君は本郷育ちだってねえ、僕もあの辺はよく知って居る。殊に森川町附近は造形深く燕楽軒の横、例の落第横丁藤むらの羊かんや等の当時を振返ってお話をされた。小栗主任存在中はよく聞かされたコメディアンのエノケンがエソにかかり足を切断手術の話をご自分の足を患づらった体験談にからませた談話を覚えております。そうこうしている間に朝鮮動乱が始まり間もなく旧燃料化学科が応用化学科に合体されました。昭和29年2月教室の創立者小林久平先生が逝去されました。葬儀準備に野方の先生宅にお手伝いに狩出され無事に盛大なご葬儀が行なわれました。その秋待望を双肩に担い山本研一教授が稲門出第一号学科主任にご就任されました。この頃から教室の研究室及び実験室も整備され学生数も増加、着々と戦後の黄金時代と言うべき教室の股販を極めつつ研究分野が実り斯界に貢献と同時に卒業生を一流社会へ送り込んだ。

之等が今日日本化学工業界に公害と称する化けものが生れた事は誠に以って泉下の小林先生をしてご苦笑なされていると思います。この32年3月、小栗捨蔵及び同34年3月富井六造教授が停年退職され、同35年1月に小栗捨蔵名誉教授が急逝されました。此の間32年9月、山本教授が学科主任を辞し、後任として宇野昌平教授が2番手旗手とし与望を一心に集め就任された。この前後から教室内がファミリー的和気藹々として学生に接し談合の場、あるときは合同スポーツ大会、ことに教室の懇親会を旅先きで開催した。平素、生まじめな故山口栄一先生、温厚篤実だった武富昇教授の珍らしい青春時代の歌曲披露等、楽しく懐かしいかずかずのおもい出は終生忘れることはできない。また山本、宇野、大坪、村井等の先生と職員関係の楽しかった魚釣り、私が余計に魚を釣り上げると山本先生が、君のは釣りの醍醐味ではなく雑獲だとよく嗜められました。

宇野先生と竿を担いで千葉方面に出かけた。先生も静かなマナーで釣れても、また不漁でも終始黙然として私か船頭が帰ろうと言うまでは絶対に釣竿を仕舞わなかった。

先生とはよく恭間の居酒屋で日本酒の献酬をくみ交しました。純日本人的の呑み手で小生と同様肴は余りいらぬ方だった。心持ちよくなると、一人で見よ東海の空明けてと口ずさんだ。私の拙ないざれ唄もよく聞いて下さった。その先生も秋の身辺に影もなく遠くへ去って行った。あ、先生よ魂は永遠にお安らかに。宇野学科主任時代から石川平七教授学科主任期間中に、学科主任と打合せご相談して各研究室に電話の引込みと併て什器の配備をして一応個人研究室の型がや、整って来た。石川平七先生は故郷の越後の国から単身笈を背に早稲田に学び、苦学力行の人でそのご苦労のことは夢にも出さず、弱い学生、また職員のご指導に私もその一人で公私に恒りお世話になりました。半面誤解されることがあるのか大器晩成型で、学科主任に推されました時、私は秘かに快哉を叫びこれで石川先生も愈々大親分に成られたと思いました。石川先生も私の転出後昭和48年2月に急にお亡くなり、宇野先生に続き私も支柱を失い人間のはかなさ、無情、諸行無常を感じます。村井先生が総長にご着任、今や学園内外一日として安穩の時は無いです。

終始温和にここにことその頃も教務部長、理工学部、理工研所長とお席の温ることもない時でしたが、会議のお済みになった後とかそのつど足を延ばし事務所に寄られ教室のことを心配されておりました。私が応化に移って来た頃、中山のお宅にお伺した時、ご夫妻もお若くあれからもう20数年の歳月が流れました。詰る処私は武富、小栗、山本宇野、石川、吉田、大坪の六主任にお世話に成ったことになります。先輩のお方では、水野、肝付の二先生を初めとして化学会関係の方々は枚挙に遑がない程公私に恒りご指導ご鞭撻を載き当初をふり返って感無量です。

教職員皆様、教室と化学会の発展を祈念致しますと共に逝くなられた諸先生方のご冥福を祈ります。

(元応用化学科事務主任 昭和50年12月 拙文撰筆)

## 燃 料 科 の 思 い 出

高 田 三 郎

私が専門部から石油工学科の事務所に転属になったのは昭和19年7月1日でした。

場所は穴八幡の裏で、旧スコットホールで赤いレンガの建物の一部が事務所で、青い木造校舎等のある一角だった。

しかし7月末に召集を受け、兵役に服した。20年8月15日に終戦を迎え、9月に除隊になった。大学に復職して見ると、5月25日の空襲で石油工学科学生実験室が焼失し、又本部の各校舎も大被害を受けていた。

住宅事情に困っていた処、元牧師が住んでいた一部を拝借して、疎開先から家族を呼び寄せて住む事が出来有難く思った。

石油工学科の教授は山本先生、村井先生、大坪先生、森田先生と職員は幸田氏、藤田氏、事務は私と羽田さん、小畑さん、学生4,50名の少数学生学科であった。

終戦後の物資不足とインフレの悪条件の中での学生生活にも昼休みになると教職員も学生と一緒に楽しく野球等をやり、現在とは異った親愛なる師弟の楽しい情景が思い出される。

食糧事情も最悪だったので空地に野菜等も作ったりした。燃料科研究室で余暇に醤油、ズルチン等を造り、分けて貰い大いに助かった事もありました。殊に醤油が大変美味かったのは今でも忘れられない。

冬は建物の廻りの小枝を切ったり、枯木等を集めて燃料にした。

当時学生だった藤井、加藤、長谷川、高宮諸氏も現在教授になられ、他の卒業生諸氏も各方面で活躍して居られます。

石油工学科は20年4月から燃料化学科と改称され、後応用化学科に合併された。

当時の建物は数年後教団に返還され、殆んど跡形もなく、現在では結婚式場等になってしまった。

私の燃料科勤務は約四年間でしたが、その間戦中、終戦、戦後と激動時代を燃料科在任中に経験した。

殺伐とした世の中であって公私共に暖かな思い出の多い燃料科勤務でした。

其の後数々の変動時代を経て、時が過ぎ昨年11月定年になりました。

大学の発展と皆様の御多幸をお祈りします。

(元燃料科事務主任)

。中村代二氏は昭和24年から40年迄応用化学科の事務主任として、又高田三郎氏は燃料学科の事務長として、長年にわたって応用化学科の為に御尽力下されました。在職中の御苦労に対し皆様と共に感謝の意を表したいと存じます。昭和50年11月、両氏の御退職に際し、お忙しいところ御無理を御願して思い出等を一筆書いて載しました。

今後とも、お二人共にお元気で末長く御活躍されることを心からお祈り申し上げます。

(編集)



# 藤井教授御急逝

応用化学科教授藤井修治氏は6月9日午前7時心筋硬塞のため落合の御自宅で急逝されました。前日まで研究室にお見えになっており我々教室員一同大きな驚きと悲しみに打たれました。52才という若さでこれからの一層の御活躍が期待されていただけに誠に残念な限りであります。ただ先生の長年の石炭化学の御研究に対し、昭和49年度燃料協会賞が授与されたこと、またその成果が著書として近く発刊の運びとなったことがせめてもの慰めであります。深く先生の御冥福をお祈りいたします。

尚葬儀は6月11日御自宅においてとり行なわれました。

## 藤井教授御略歴

大正12年4月10日愛知県知多郡鬼崎村において御出生。

昭和16年3月県立半田中学校卒業、18年9月早稲田大学第一高等学院修了、21年9月同大学理工学部燃料化学科卒業、24年4月講師、31年4月助教授、38年1月工学博士、39年4月教授。49年燃料協会賞受賞。

---

## 藤井教授の急逝を悼む

応用化学科学科主任 加藤 忠 蔵

藤井先生の御具合の良くないことはおうかがいしておりましたが、毎日研究室にお姿をお見せになり、講義もされ、お話しもさせて頂いておりましたので、今回の突然の御死去には唯々驚きの外ありません。先生には昭和21年理工学部燃料化学科を卒業され、私とは僅か1年の違いでありましたので、学生時代より30有余年公私に亘って親しくおつき合いをさせて頂きました。

旧制の第一早稲田高等学院では優等生として御卒業になり、その明晰な頭脳は我々仲間の者だれ一人知らぬ者がおりませんでした。戦時中学部にこられました際には学力・体力共に優秀でなければ合格しないとされておりました海軍技術将校委託生に合格され、世が世であれば海軍の技術畑の指導者になっておられたことと思います。それが終戦になったため、明晰な頭脳を買われて学校に残られることになり、教育と研究に大きい功績をあげられることになりました。

研究としては日本における石炭化学の第一人者として自他共に許す存在でありましたし、燃料協会より協会賞も受賞されました。最近では有機合成の研究に専念され、数多

い業跡をあげておられました。

早稲田大学における教育面では有機化学の責任者として厳しく指導され、応用化学の根幹をなす基礎面について大きな責任を果されて参りました。また藤井教授の研究室から数多くの卒業生を出されていますが、学界においても工業界においても優秀な人材が輩出しており、その指導や薫陶がいかに適切さを極めていたかをうかゞいしることができます。

また人一倍強い責任観と正義観をもって、会議に際しても発言され、その一言一言は真に磐石の重みをもっておられ、応用化学科においてなくてはならない存在でありました。ここ数年大学は学内外からその改革がさげばれておりますが、これから御活躍を頂こうと思っておりました矢先の御不幸で真に残念でなりません。

私的な面においても30有余年のおつき合いを通じてお互いに遠慮なくものをいわせて頂き今ここに君を送ることは真に痛恨の極みであります。幸い御子息御嬢様も立派に成人され思い残されることもないと思います。残された御家族の方々の悲しみも察するに余りありますが、応用化学科の我々にも今後とも少しでもお力にならせて頂きたいと思っております。

今ここに君を送るに当り安らかに眠られることを心より祈念致します（昭和51年6月14日記）。

---

付記 今回は“だより”発行の直前にこの訃報に接しました。とりあえず加藤学科主任のみから追悼の御言葉を頂きましたが次号には多くの方々からの想い出のお話しを載せたいと考えております。（編集）

## ○会務報告

### 昭和51年度総会

5月13日（木）午後5時30分より大隈会館において昭和51年度の総会が開かれた。長年にわたって、会長として応化会のために盡された棚橋幹一氏の辞任の挨拶の後、新会長に就任された鎮目達雄氏（大阪有機化学工業社長）の今後の会運営の抱負、51年度の事業計画等の発表があり、6時より特別講演、7時より懇談会に移り、歓談のうち、8時半校歌斉唱 散会した。出席者は以下の通り（敬称略）。

水野敏行	秋山桂一	神原周	中島勇吉
後藤勝三	青山固	田上信	堀米耕平
正住弘	鷹居頼明	鎮目達雄	桑原幸二郎
米津新松	棚橋幹一	中岡敏雄	百武寛
春日井佐太郎	上田宏	兼松貞雄	古関敬三



金谷謙介	吉田茂治	百目鬼清	小林宏
佐藤一男	染谷和夫	名手孝之	東野博樹
伊藤孝	中曾根莊三	桑原光雄	内海碩夫
磯野好治	高橋章	坂田誠	高木正雄(代理)
若山一彦	清水常一	田中良雅	寺尾隆
赤林宏	豊田善雄	森本源藏	小野隆
柴田嘉一郎	大坪義雄	加藤忠藏	鈴木晴男
佐藤匡	宇佐美昭次	平田彰	菊地英一
岸本孝夫	篠原功	湯本貢	米田潤三
斉藤恭一	北村智		

## ○役員会

51. 5. 13 大隈会館

総会に先立ち役員会が開かれ棚橋幹一氏の会長辞任、鎮目達雄氏の新会長就任が承認された。尚現在役員は以下の方々です。

会 長 鎮目達雄

副会長 大友恒夫, 加藤忠藏

監 事 若山一彦

運営委員 (教室側) 大坪義雄, 篠原 功, 森田義郎, 城塚 正, 鈴木晴男, 佐藤 匡,

宇佐美昭次，豊倉 賢，平田 彰，菊地英一，岸本孝夫  
 (卒業生側) 色川御胤，若山一彦，鎮目達雄，棚橋幹一，中岡敏雄，  
 百武 寛，大友恒夫，清水常一，中曽根莊三，赤林 宏，百目鬼清，  
 木巴隆保，柳沢 亘，名手孝之，前島哲夫  
 (庶務) 平田 彰，菊地英一(会計) 鈴木晴男(編集) 佐藤 匡，岸本孝夫

51年度総会において，佐藤一男氏(白洋舎リネンサプライ工場部長)の特別講演があった。氏は「クリーニングの今昔」と題して石けんの歴史から今日のクリーニングの問題点まで幅広く，話術巧く話されて，質問も続出し，大変活気にあふれた講演会であった。



## ◎特別講演

### ○昭和50年度行事

- 6月12日(木) 役員会，総会(大隈会館)  
 講演「セメントの新しい焼成技術について」  
 川合善三郎氏(秩父セメント) (74名)
- 10月8日(水) 応用化学科研究室紹介(学生部主催)
- 11月19日(水) 特別講義(I)  
 「新しい社会と化学技術」 神原 周氏(東京工大名誉教授)  
 (前号掲載) (150名)

1月21日(水) 特別講義(Ⅱ)  
「化学技術の開発と発展のさせ方」  
鎮目達雄氏(大阪有機化学工業社長)  
(150名)

2月20日(金) 運営委員会(大隈会館)

当日は厳しい寒さにもかかわらず多数の教職員、学生を集め大変盛会であった。氏は「化学技術と発展のさせ方」と題して、将来の開発テーマを、人工臓器、燃料電池、ターボの改質、海水の淡水化等多項目にわたって提示され、研究開発を進めていく上で、最っとも大切な事は良き指導者、良きテーマ、及び無我の精神であることを強調して講義を終えられた。大いに啓発を受けた2時間であった。

## ○昭和51年度事業計画

1. 会員名簿発行
2. 学生会活動(特別講義、球技大会等)
3. 応化会だより(2回)

## ○関西支部例会



関西支部例会は今年も早桜会の名の通り、4月9日夕刻より東洋ホテル（大阪）で、大坪、加藤両先生の御出席のもとに、会員44名参加して開かれました。

このたび20余年にわたり、関西支部のため献身的に尽力され、その発展に多大の貢献をされた鎮目支部長が、応用化学会会長に内定されたため、これを機会に支部長を高橋章さん（昭20卒、日本化学機械製造機社長）にバトン・タッチされることになりました。

例会は鎮目、高橋新旧支部長の挨拶に始まり、つづいて両先生より教室の近況のお話がありました。不況下にもかかわらず卒業生の就職も全員決定したことはご同慶の至りです。ただ応用化学科志望者が年々減っていることは世相の反映とはいえ、残念なことです。

毎回、元気な姿で出席される上田先輩（大9卒、旧サントリー機）の乾杯の音頭により会食に入り、この間に会員の皆さんの自己紹介がありました。

アルコールの吸収が進むにつれて会場の空気も一層和やかになり、時間の経過も忘れるほどでした。最後に池田規久雄さん（昭40卒、丸紅合成樹脂部）の若々しい指揮で“都の西北”“紺碧の空”を高らかに合唱して、8時半、名残りを惜しみつつ会を閉じました。

出席者 大坪先生、加藤先生

上田、木村(清)、江崎、上杉、川田(恒)、藤木、水科、由良、荒川、前島、鎮目、山田(元)、久保田、好本、多田、中村、西、真栄城、吉山、河本、西(創平)、長谷川(宏)、松久、飯田、菅井、川手、吉田、高橋(章)、池田(勝)、覚野、小林(雅)、根、中川(陽)、高橋(順)、馬場(哲)、増子、小野村、一色、加藤(実)、池田(規)、東野、森脇、高久、大橋  
(中村敏夫 記)

## ○受賞

昭和50年度、石油学会賞

森田義郎氏（早稲田大学応用化学科）  
「炭化水素の接触反応に関する研究」

## ○学位授与

工学博士（東工大）野口達彦（呉羽化学工業機）  
「りん鉱石の反応に関する研究」

- 工学博士 本 田 憲 治 (大学院理工学研究科応用化学専攻)  
「高分子金属錯体と酸素分子の相互作用」
- 理学博士 篠 田 裕 之 (大学院理工学研究科応用化学専攻)  
「バイブロニック展開法による分子振動スペクトル強度の研究」

## 教室だより

### 入学試験

理工学部での入学試験が2月27日に行なわれた。本年は教育学部、商学部で受験生が3万を越え、試験場として国士館大学まで借りたとのことであるが理工学部は16,324名(応化は1,336名)で、そのうち3,689名(応化309名)が合格発表された。昨年からの入学手続きは一次、二次に分かれ、一次手続き(入学金のみ120,000円を納める)2,808名、二次手続き(学費年額544,500円、その他33,000円納める)1,313名であった。現在応化1年生は在籍者188名である。

### 大学院入学推薦

理工学部では大学院進学に際して推薦制度がおかれており、学部成績が上位 $\frac{1}{3}$ 以内であれば無試験で大学院に入学出来る。来年度の進学予定者として59名(来春学部卒業予定者169名)が推薦入学を許可された。これに9月に行なわれる入試を受けて入学する学生を加えると来年度の修士1年生は70名を越えるものと予想される。

### 大学院制度改革

今まで早稲田大学の大学院は修士過程と博士過程があったが省令の変更に伴い51年度から早大には博士過程のみがおかれることになった。しかし新しい博士過程は前期(2年)と後期(3年)に分かれ、前期修了者には修士の学位を授けることになるので、実質的には今までと変わらない。またこの変更に伴って専修名や講義名も変わったが、これも実質的な変わりはありません。

### ソフトボール大会

応化会主催のソフトボール大会が6月18日上井草総合グラウンドにおいて行なわれた。出場チーム(30)(各学年および研究室より)が午前10時から午後5時まで熱戦をくりひろげた。

(佐藤 匡)

# 昭和50年度会計報告

## 収 支 決 算 表

( 自 昭和50年4月1日 )  
( 至 昭和51年3月31日 )

収 入			支 出		
費 目	金 額	予 算	費 目	金 額	予 算
前期繰越金	144,825	144,825	会報費	1,187,680	1,000,000
正会員会費	1,528,500	}1,500,000	名簿費	118,405	0
有志会員会費	10,000		集會費	144,065	150,000
学生会員会費	387,000	350,000	学生会費	116,280	180,000
諸利息	133,787	100,000	集金費	69,615	80,000
寄付金	206,000	0	支部費	50,000	50,000
雑収入	1,500	0	用品費	32,640	30,000
			事務費	330,000	330,000
			雑費	7,400	25,000
			名簿刊行積立金	250,000	150,000
			次期繰越金	105,527	(+)99,825
	2,411,612	2,094,825		2,411,612	2,094,825

寄付金：日本化学機械製造(株) 殿 ￥200,000  
 穴倉幸一殿(有志) ￥5,000  
 戸波宗彦殿(新11) ￥1,000

## 貸 借 対 照 表

(昭和51年3月31日)

借 方			貸 方		
費 目	金 額		費 目	金 額	
現 金	37,767		前納会費積立金	934,700	
郵便振替	39,262		名簿刊行積立金	2,150,000	
郵便貯金	32,584		基 金	1,390,000	
普通預金	60,114		次期繰越金	105,527	
定期預金	4,250,000				
仮 払 金	160,500				
	4,580,227			4,580,227	



## 小林奨学金利息収支決算表

( 自 昭和50年4月1日 )  
( 至 昭和51年3月31日 )

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前期繰越金	455,111	教員研究費	420,000
貸付信託収益金	429,314	次期繰越金	473,665
普通預金利息	9,240		
	893,665		893,665

基金（貸付信託）総数 477 万円（小林基金 354 万円，水野氏 123 万円）  
使用済利息 326.5 万円

## 昭和 51 年度 予算表

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前期繰越金	105,527	会 報 費	1,000,000
正有志会員会費	1,500,000	集 会 費	150,000
学生会員会費	380,000	学 生 部 会 費	190,000
諸 利 息	100,000	集 全 費	80,000
収 入	300,000	支 部 費	50,000
名簿積立金取崩	1,600,000	用 品 費	30,000
		事 務 費	350,000
		雑 費	20,000
		名 簿 費	2,000,000
		予 備 費	115,527
	3,985,527		3,985,527

## ◎ 編 集 後 記

- 毎度のことですが、総会に出席するたびに若い人の顔が殆んど見られないのは淋しい。今回の総会でも40代以下の人は60人中数人です。こういう会は若い人達には魅力のないものなのでしょうか。
- 過去の会費の納入状況は平均約40%だそうです、ここ15年は20%代に下がっています。この点でも関心の薄さがはっきり出ています。
- 年代の違った世代が懇親の会を持ち、それを維持していくことは大変難かしいことですが、皆で努力して行きたいと思います。

(岸本記)

昭和51年7月 発行

発 行	早稲田応用化学会 新宿区西大久保4 早大理工学部内
編集兼 発行人	佐 藤 匡 岸 本 孝 夫
印 刷	鑿 掘 越 研 究 所 千代田区神田神保町2-20